

新著紹介

松本文三郎著

○東洋文化の研究

大正十五年十一月、岩波書店發行

定價二圓五十錢

これは松本博士が、最近數年講學の餘に成る論文十八篇を採次して出されたもので、地理學者には縁の薄いものであるしかし、古代支那の鐵器について、又は琉璃考などいふ考古の論文は人文地理學を專攻するものには一讀すべき論說であり古代埃及の饗衛に關して先生の該博なる考證のごとき、後進の以て學ぶべき多くのものがある。偉人玄奘渡天の業跡をたゞへて、密教史の研究に炬火を投ぜられたこの種の智識は、東洋の地理を學ばんとする人には必要であると信ずる(藤田)

○埼玉茨城群馬三縣下に於ける指定史蹟

昭和二年三月、内務省發行

この史蹟調査報告第二冊は柴田常恵氏の執筆であるらしい吉見百穴、船塚山、常陸國分寺、多胡碑、山上碑、金井澤碑上野國分寺等十一篇が收めてある。關東平原の東北に存する先人文化の跡を明にして、之を後昆に傳へんとするものである。考古學者でなくとも、一應はこゝろした報告によつて郷土を知るやうに心掛けねばならぬ。(藤田)

○日本の民家

今和次郎増訂版

昭和二年四月十五日、岡書院發行

定價三圓五十錢

今氏の獨得のスケッチと、流麗な叙述とによつて、我國で最初に日本の民家を研究した手頃の本であつたが、今度之を

増訂して出された。初篇には民家の構造間取等が論じてあるしかし語つて未だくはしからず、史的考察が殆ど缺如してゐる恨がある。次の中篇の繪と説明はいかにも珍らしい民家が集めてある。これもさうしたものと分布に關する考察が缺けてゐると思ふ。ほつり／＼とこゝにこゝにある、あすこゝにあると聞かされてゐるに止まる。予は著者にこゝろした民家の相互の關係とか、其發達した系統とかいつたものを、著者の自序の中にあるやうに、早く(第二次的本を)書いてもらひたいと思ふ。しかし人文地理を學び日本の民家を研究せんとする人の必讀の書であることは予の贅辭を要しないことである。再版の出たことを非常に悦び、岡書院の努力を買つてよいと思ふ。(藤田)

雜報

○伊豆湯ヶ野附近に於ける二三觀察

天城峠の長いトンネルを越えて、坦々とした阪道を下ると、河津川上流に梨本村字萩乗と云ふ小さな部落に出る。萩乗の漣より下流に點々として僅かの人家がある。そして其處には西北から落ちる一支流との合流點に其聚落をなしてゐる。谷は深くして、兩側に急傾斜かなす山側を、丹念に階段を作り(重に南向斜面即左岸)其處には一分の隙も餘さず畔を作り畑地としてゐる。そして麥を蒔いてゐる。畔は稻作の用意であり又斜面の崩裂を防ぐ爲であらう。街道から見下せば非常に美しく見える區切には地面の都合で丁度小さな皿程にも思はれる個處をも殘さず畔が作つてゐる、其殆ど無駄のない勤勉な